

養育里親

～もうひとつの家族～

26

坂口 伊都

はじめに

前回マガジンの原稿を書いている頃は、里子に関する心配事はありませんでしたが、比較的和やかな日常を送っていました。この連載で書いていくことが見つからなくなるかも知れないと呑気に思っていたのですが、残念ながらそうはいきませんでした。この3か月間、目まぐるしく里子の行動問題が起き、その対応に追われ、まるで嵐の中に巻き込まれているようでした。そして、里子が我が家に委託されて以来、もっとも大きな危機と直面していたと思います。

今まで里子が起こしていた行動問題が頻発し、それにプラスで家を飛び出すという行動が追加されました。発熱しているのに学校に行くと言

わず、それを制止しようとする里父と取っ組み合いになり、家を飛び出したのが始まりでした。男同士なので、抑える方も暴れる方も激しさを増し、説得の声も聞こえない程パニックとなった里子は、逃げ出すことだけに精一杯になり、間隙を縫うようにして飛び出して行ってしまいました。夫が「出て行った」と言うので、驚いて靴を見るとそこにあるので、どうなっているのかと聞き返すと、靴下のまま出て行ってしまったと言うのです。靴下でそう遠くには行かないだろうと慌てて探しましたが見つかりません。結局、片道40分程度の道のりを歩いて学校まで行っていました。それから、何か逃げ出したいことがあるといなくなってしまうことを何度か起こしています。

家だけでなく、放課後等デイサービスの車の

中で友達とトラブルになり、職員に注意された時もうなくなってしまうました。その時は、警察に捜索願を出す寸前のところで家に帰ってきました。その後、デイサービスの送迎時に姿を消してしまったこともあり、38℃を記録する炎天下の中、朝ごはんも食わず、水分も持たず、着の身着のままになってしまったので、熱中症で倒れても身元が判明しなくなるかと心配し、人生初の捜索願を警察署に出しに行きました。

人は危機的な状況に置かれると攻撃か逃走、固まるかの行動になると言いますが、パニックになった時は、まさにその逃走状態だったのではなかったかと感じます。冷静に考えると逃げ出す程のことではなかったのですが、里子はパニックになる閾値も小さくなっていて、ちょっとしたことで反応していたように感じました。また途中から、パニックでもなく、姿を消すことを選んでしているところも見られるようになりました。

この原稿を書いている今は、幸いお金を持たずに飛び出しているのが家から4~5kmの範囲で見つっていますが、お金を持って出たら、電車に乗ることもできるので、なかなか見つけられなくなるかも知れません。捜索の回数を重ねる度、里子の安全を守ることが難しくなることを実感していきました。

中学2年生にもなると、身体も大きくなり、世界も広がり、そこに思春期も重なり、里子の行動が外に外に向かうことを容易に止められなくなっています。家での生活に限界を感じ、ここで一度立ち止まらなければならない状況だと判断しました。

今回は、その葛藤について書いていこうと思います。どうぞ、最後までおつきあい下さい。

生活を続けるために

立ち止まるとは、家族から一定期間離れて今までのこと、そしてこれからのことを里子自身に意識してもらうことです。里子をずっと見ていると、怒られて怖いから降参するというパターンが身についているようでした。毎回、その場をやり過ごすことに必死になり、何をしたらいいのかわからないのかという積み上げができずに終わってしまう感じです。それを打破しようと、できるだけ何が起きたのかを解説して聞かせるということを試みてきましたが、里子が自身のことを振り返るところまで届かず、同じことの繰り返しで、前に進めない印象でした。一度立ち止まって考える環境を作る必要性を感じました。そして同時に他の家族も今までを振り返り、そしてこれから先の生活をどう考えられるのかを話し合う必要に迫られるところまでできていました。

その事を伝えると里子は、少しの期間でも家から離れるのは嫌だと抵抗をしました。児童相談所の方も何度も訪問して、里子にこれからの生活に必要なことから粘り強く説明をしてくれました。里子は、「嫌、行かない」を繰り返していました。その中でも、里子の行動問題は止まることなく続いていきます。本人にも自分をコントロールできず、どうしようもできない状態なのでしょう。いろいろな大人が里子に一時的に離れるだけでまた戻って来られること、待っているという言葉をかけてくれるのですが、その言葉を信じきれないのか、逃げ出してしまうます。

当日も逃げ出し、見つかったからまた話し合いになりますが、逃げられないとなると次は暴れだしました。不安時のセオリー通りの行動です。大人に頼って自分の気持ちをなだめるのではなく、自身で慰めているのです。4年間一緒に

暮らししてきましたが、まだまだ里親をあてにしてもらえないのだなと悲しくなります。嫌なことを避けるために見知った大人を頼ることはできますが、自分の気持ちを落ち着けて次の一手のために大人を利用することはしません。物心ついたころから、自分で自分を慰めて生きてきたのだなあと改めて感じさせられます。

その日は、里父は仕事だったのですが、急遽半休を取り、最終的に里父母で連れていくことになりました。車のドアにチャイルドロックをかけ、里子を迎えに行きました。里子に「車に乗る？」と声をかけると「乗る」と言ってきました。里子は何やかやと理由をつけて家に帰ろうと仕向けますが、「帰りません」と里父母。「じゃあ逃げる」とドアを開けようとしませんが開きません。そこから、やっと里子が話し始めました。「今日、帰りたい。行くのいやや。離れたくない。今日帰れる可能性は何%？」と聞いてきます。「じゃあ、今日あなたがしたことを思い出してみようか」と振り返ります。「児童相談所の人に来てくれたな」「うん」「で、あなたはどうした？」「逃げた…」と今日の行動を振り返っていきました。「それで、あなたは今日帰れる可能性は何%ぐらいあると思う？」「5%…。よくわかっていらっしゃる。その日は、これからも一緒に暮らしていくためにお互いに考える時間を持つ必要があることを里子と話しました。児童相談所の方が家に来てくれてから里子と別れるまで8時間かかりました。全員、クタクタです。逃げて暴れてと大変でしたが、離れてみると落ち着いて過ごしていると聞きました。この展開も想像通りでした。

里子と離れて過ごした期間、最初に起きたのは私の体の異変でした。疲労が溜まっていたのでしょうか、体調不良に陥りました。家の中は、トラブルが起きることもなく、平和です。家族として、振り返るために一人暮らしをしている息子も呼び、外食をしながら話をしました。息子には、少し離れた立場で感じたことを教えてほし

いとお願ひしました。娘は「何で、あかんとわかっていることをするの？」と質問されたので、「里子は大人を頼ることを知らずに自分で自分を慰めてやってきたのだと思う。でも、子どもがすることだから、上手いかなくて当然でしょう。その上手いかないことを繰り返してしまうのだと思うよ」と答えました。息子は「それって、解決しようがないやん」と言います。そうなのです、里子の行動がすぐに変化するわけもなく、解決するようなものではないことを私たちは悩んでいるのです。

だから、できることをして、里子の様子を見ながら生活が維持できるのか、ここでの生活が里子にとってどのような意味を持ち、里子を安全に守ることができているのかどうかを図っていくしかないのです。そこに答えがあるわけでもなく、綱渡りをしていくことは変わりません。今回の覚悟は、同じ綱渡りをしていくにしても、綱が少しでも渡りやすくなるように努力をしたという感じでしょうか。



大人側の責任

一端、里子と距離を置き、お互いに今までのこと、これからのことを考える時間を持ちました。里子自身も「怒られるからその場を何とかやり過ごそうと必死になる」という行動パターンから、自分のしたことを考えることをし始めるようになりました。その行為は、里子にとっては新たな体験で、戸惑いもあり不安定になりやすいと想像がつかますが、帰ってきてからの受け入れ態勢の準備が足りず、落ち着かない日々が続きました。

今回、里子の行動問題が再発していった経緯には、大人側の歩調の合わなさがあったので、戻ってからの里子の不安定さに拍車がかかりました。里子自身もどうしたらいいのかわからずに悪循環にはまっていく様子でした。

これまで、里子に最も学んでほしいこととして社会で生きる術であるコミュニケーションの取得が第一に置かれました。里子は、よく気づく優しい面や人の役に立とうと頑張る面を見せてくれていましたが、それが長続きするわけではなく、いい具合に進んでいるなあという矢先に悪態に変貌することがよくありました。普段から挨拶が苦手で、口が悪く、大人の言うことを聞かない面が見られます。いい所もいっぱいありますが、悪くなる面も併せ持っていて、挨拶をしようねというような小さなことから意識して伝えながら、社会で受け入れられない行動については、どの大人も毅然と伝えていくということを心掛けていました。この場面ではダメだと言われたことを違うところで許されると、里子が混乱してしまいます。そして、里子の周りには大人が自分のいいところも悪いところもひっくり返って知っていて、かわいいと思っていることを伝え、何処かで悪さしたら、里子を見守っている大人たちがちゃんと知っていることを里子に

伝えながら足並みを揃えてやってきました。その歩調があうことで、落ち着いていく時間が少し伸び始めたかなという感触を持ち始めていましたが、新年度になり、支援者の入れ替わりが起ることで、その足並みが乱れました。

その中の一人が、里子の自主性を伸ばしたいという部分が先走った対応に特化していきました。もちろん、自主性をはぐくみことは大切で否定をしません、里子にはわかりやすい枠を設けて、その中で頑張れるという体験も必要です。その枠の部分を否定的に感じられたのだと思います。

里子は発達に大きな凸凹があり、一面だけを見れば、いい部分を伸ばしさえすれば全体的にいい方向に行くのではないかと感じさせるところがあります。私自身も、この子に出会った頃、児童養護施設の先生方の話がピンときませんでした。関わりが深まっていくことで、できることとできないことの差が激しく、わかりそうなことでもわからない部分があることが見えてきました。

里子は、大人たちからも理解が難しく、里子自身も様々な面で見えている部分と見えてこない部分で混乱します。大人の足並みが揃わなくなり、そのしわ寄せを受けるのは里子でした。里子が、どんどん混乱し自分自身を傷つけているように見えました。してはいけないとわかっていることを止められない、それを意識するようになったので余計に落ち着かなくなるという感じでした。次から次へと行動問題を起こし、里子自身が途方に暮れているようにも見えました。

シンプルではない家庭の生活環境が行動問題を誘発し、イライラが止まらない里子は里親や周りの大人たちに様々な方法で怒りをぶつけてきました。これ以上、里子が傷ついていき、私自身が里子を護ることができないと実感した時、自分が限界に来ていることに気づきました。仕事から家に戻る電車の中で動悸がしてきました。

夫も娘も出かけている間にいろいろな行動問題に対応するのは私です。何か起きれば一人で判断し、警察に行ったり、探したりすることに疲れしましたし、一人でしなければならぬ限界と自分がその状況を恐れていることも感じました。ここでの生活がこの子のためにならない状況に陥った時、この子との生活を諦めると腹をくくらなければならない所まで追い込まれました。それも私が決めなければならないのかと思うと平常心でいられません。その覚悟をした時、里子に状況が伝わり、里子が憔悴していきました。里子と話し込んで、里子と再スタートすることになりました。

里子にとって里親はどのような存在なのでしょう。「お父ちゃんとお母ちゃんと離れたくない」と泣かれた時、この子と歩んできた日々は家族になっていくものだったと思っても許してもらえるのだろうかと感じました。

終わりに

この数か月は、目まぐるしい毎日で戦っているようでした。この戦いが終わったかどうかはわかりませんが、爆発していた時期が過ぎ、落ち着きを取り戻しつつあるように感じています。

その前が落ち着いていただけに急激な展開に驚きました。関係がだんだんと悪化していくのではなく、手のひらを返したかのように襲ってくるとは知りませんでした。

里子の思考の中に「状況を振り返って感がえる」という回路ができたことは大きな一歩だったと感じます。ただ、それを得る時に里子自身はかなり不安定になることも覚えておいた方がよさそうです。それを恐れて行動しないよりも、覚悟をして行動を起こすと次が見えるようになる

と実感しました。

また、今回はここに載せた我が家の猫たちに助けてもらいました。スリスリしながらニャーと鳴かれると癒されます。一人でしようとする限界があり、どんどん沈んでいってしまいますが、甘えてくれる猫のおかげで気分転換ができました。もちろん古株の犬も私を励ましてくれています。言葉を話さない動物はいいですね。

これから、どのような展開になっていくのかわかりませんが、次回、この原稿を書く時には、落ち着いていたいものです。

